

〔論 文〕

人間の苦悩と人生の意味

—社会福祉哲学の根本問題—

秋 山 智 久

Human Sufferings and the Meaning of Life
—A root problem in social welfare philosophy—

Tomohisa AKIYAMA

Why do we suffer throughout our lives from problems related to our health and bodies, and from our inability to do what we want to do? What meaning is there in lives filled with such suffering? These are fundamental problems in human life and also in the area of social welfare philosophy.

In social welfare philosophy we must consider the following questions.

- (1) Why are there things that we wish to achieve but which are forever beyond our abilities?
- (2) How do we live with our failures to attain the things we most yearn for?
- (3) Why must only I encounter such suffering?
- (4) Why does God allow us to suffer?
- (5) How can we acquire peace of mind?

This paper considers human responses to affliction, exploring many examples of people's attempts to cope, and tries to clarify why we suffer and the meaning of lives that inevitably include misery. Suffering, the author concludes, makes it possible for us to live richer lives, and that, therefore, we should 'say yes to life' even when we find ourselves in misery.

Key words: human sufferings and misfortune (人間の苦悩と不幸), meaning of suffering (苦悩の意味), Victor E. Frankl (ヴィクトール E. フランクル), the will to meaning (意味への意志), transcendent meaning (超意味)

はじめに——苦悩の数々

人間はなぜ苦悩するのであろうか。

そして、この苦悩多き人生に果たして何の意味があるのであろうか。

この問いは、人間の人生における最大の問題である。そして、社会福祉哲学という人間の不幸を検討する領域においても、根本的な課題である。

そこには次のような疑問が生じてくる。

- (1) 人生には、懸命に努力しても、自分の能力以外の理由で達成されないことがあるのは、何故なのか、

- (2) 生涯かけて為した事が、無に帰するようになることがあるのは、何故なのか、
- (3) 何故、このような形で挫折するのか、
- (4) どうしてこんなに自分は運が悪いのか、上手くいかないのか、自分だけが、どうしてこのような目に遭うのか、
- (5) 何故、このように損な身体(健康)を与えられたのか、
- (6) 求めても、求めても得られないものがあることを、どう納得したらいいのか、
- (7) 心から愛していた大切な人を失うことを、どう考えたらいいのか、

- (8) 切り拓こうとしても、立ち塞がるのは、運命なのか、自分の努力の足りなさなのか、
- (9) こんなに救いを求めても、神が一切、応えてくれないのは何故なのか、
- (10) ならば、どのように考えれば、心の平安が得られるのか。

緑と青の豊かな、世界一の深さと透明度を誇るロシアのバイカル湖を詠った民謡『バイカル湖のほとり』の歌詞の3番は胸を打つ。

「暗い世を呪いて 哀し歌 唄う」(中央合唱団訳)

【個人(心身)的な苦悩: 所詮、他人ごとか】

『人は見た目が9割¹』という本がある。人間の「見た目」(外見と「しぐさ」などが、言葉による伝達よりも重要であること)を取り扱った本であるが、「外見」よりもまず人目につくのが、「外形」である。

人間の持つ身体的な苦悩は深い。身長・体重が正常でないこと、人並みを大きく外れていることは、多くの場合、普通の生活を送ることを邪魔する²。

それ以外にも、人間の個人的な苦悩には、心理的な悩み・経済的な悩み・人間関係の悩みなど、多数・多様なものが存在する。

しかし、その当事者ではない人、つまり、それを横から見ている人はどう感じているのであろうか。所詮、自分の問題ではない「他人ごと」なのか。

または、どうしようもないその人自身の運命か宿命か、または人間の意思が介入できるものならば、それは個人の責任か、はたまた社会的な責任が追求されることなのか、――。

こうした時に、「可哀相に」と思う人は、「自分のことでなくて良かったという安心感」が先立つのであろうか。その時、自らの「内なる差別」に気づかないのであろうか。

このような場合、優れた条件を持つ者が、そうでない者に働きかける時に無意識に持ってしまう傍観者の態度や、「高みから見下ろす」姿勢に問題がある。

そこには、相手に対して「痛み」を持った振りをする良心めいたポーズ、他者の痛みに関心が眼前で

直面しているのに、他の問題(例えば、社会のせい)にすり替えてしまう狡さがある。

中島義道は『『さわやかな自負心』『厭味のない自信』『まったく高慢を感じさせない優越感』こそ、最も危険である³』という。

他者に働きかけていくヒューマン・サービスや援助専門職の職業の中に、「なぜ他者のために働くのか」を単純に自分の職業としてのみ捉えて、決して、その内なる「差別感」に気づかない場合もある。つまり、人に働きかけること、役立つ仕事をしていると思っていることの深層心理の中に、密やかなる優越感または自らの劣等感を隠す方策としての働きかけがあるのかも知れない。これを「救世主(メサイア)コンプレックス」という。

ダンテ(1265-1321)は『神曲』の中で「地獄に至る道は善意によって敷き詰められている」と語った。

法然に多大な影響を与えた中国唐代における浄土教の祖・善導大師(613-681)は、こうした人間の善意に秘められた毒を「雑毒^{ぞうどく}の善⁴」と喝破した。

1 人間の苦悩

1) 人間苦

「不幸な人間は、一生不幸に生れついているにちがいない⁵」と昭和初期の流行作家・吉田紘二郎(1886-1956)は小説『人間苦』の中で述べた。作家の直感とはいえ、どきりとする表現と内容を持っている。人生の不条理は、不幸な人が誠実に生きようと努力しても、いつも不幸であり、逆に不誠実な人が楽々と幸福に生きることができることもあることを示している。

しかも人間の幸福と不幸を探る社会福祉において⁶、恐ろしい不幸とは、前述の心身に関する苦悩にも増して、社会的な原因による苦悩である。そこには人間の残酷さ、非人間性による残虐さが表れているからである。しかもそれを普通の理性的な人間が、社会の態勢の中で迎合的に犯してしまうことがあるからである⁷。ある種の自己保存である。

こうした明白な差別以外において、前述したように、人間は多くの場面で自らの「内なる差別」に気づかない。

2) 人間の苦悩とは何か【仏教】

釈尊は、人間の四苦八苦を説いた。「四苦」とは、釈迦が王子として生まれ育った迦毘羅城^{かびら}の四つの門から出た時（「四門出遊」^{しもんしゅつゆう}）に見た、人間の「生老病死」である。生もまた苦しみなのである。シェイクスピア（1564-1616）は「人間は泣きながら生まれてくる」と描いた⁸。人生の全ては「苦⁹」なのである。「一切皆苦」である。

「四法印」と呼ばれる仏教の思想を特徴づける四つの基本的主張は、諸行無常、諸法無我、涅槃寂^{ねはんじやく}静^{じよう}の三法印に、「一切皆苦」の一句を加えたものである。「一切諸行皆悉是苦」と言われるものである。

さて、残りの「八苦」の五番目は「愛別離苦」——愛するものと別れる苦しみである。人生の出逢いは、結局「会者定離」^{えしやじょうり}なのである。六番目は「怨憎会苦」^{おんぞうえく}——怨み、憎む者と近くで会わなければならない苦しみである。七番目は「求不得苦」^{ぐふとくく}である。人生には、求めても、求めても、どんなに願っても得られないことがあるという厳粛な事実に向き合う苦しみである。八番目は「五蘊盛苦^{ごうんじょうく}」¹⁰である。人間の五つの感覚が活発に活動して、次々に欲が起こり、欲求がいつも満たされないことによって、逆に得てしまう苦しみである。

例えば、優秀な人が社会に受け入れられない苦悩などもここから生ずる。正に「千里の馬は常に有れども、伯樂は常に有らず」の姿である。

しかし逆の姿もあり得る。これを石川啄木は詠う。

「人並の才に過ぎざる わが友の 深き不平もあはれるかな」（『一握の砂』）

3) 人間の苦悩とは何か【キリスト教】

人間の苦悩を恐ろしいまでに根底から表現したのはキリスト教旧約聖書の「コヘレトの言葉」（「伝道の書」）である。

「既に死んだ人を幸いだと言おう。更に生きていかなければならない人よりは幸いだ。いや、その両者よりも幸福なのは、生まれて来なかった者だ。太陽の下に起こる悪い業を見ていないのだから。」

（新共同訳：コヘレトの言葉：4章2～3節）

生まれなかったことが一番良いのだと言う。

また、旧約聖書「ヨブ記」に記述されたヨブの苦悩には、すさまじいものがある。

サタンをうち破ろうとする神の試みによって、誠実に生きてきたヨブに四つの災難が与えられ、努力をして得てきた多くの財産も我が子も自分の健康も全て失ってしまう。つまり、七人の息子と三人の娘、そして財産である何千頭もの羊や牛を一日にして奪われ、ひどい皮膚病に冒されるのである。

このような理不尽な災難に、妻は神を恨もうとする。しかし、ヨブは言う。

『お前まで愚かなことを言うのか。わたしたちは、神から幸福をいただいたのだから、不幸もいただくのではないか。』

このようになって、彼は唇をもって罪を犯すことをしなかった。」（新共同訳：ヨブ記：2章10節）

「主は与え、主は奪う」（ヨブ記：1章21節）のである。ヨブはそれに耐えた。

しかし、通常、人間は疑問に思う。なぜ誠実に生きてきた自分に、自分だけに、このような不幸が押し寄せるのか、と。

なぜ、こんなことが起こったのか、自分がどんな悪いことをしたとでもいうのか。そして、その不合理に対して思うのである。「神は何をしているのか」「神はいるのか」と。この悲痛な叫びに対して、神は一切応えない。これはカトリック作家、遠藤周作（1923-1996）の名作『沈黙』のテーマである。

この神の「永遠の沈黙」（A. ヴィニー：仏、1797-1863, 作家）について、シモーヌ・ヴェイユ（後述、1909-1943）は考える。

「不幸な人間の発する《なぜ》という叫びには返答が与えられない。この《返答がない》状態すなわち沈黙は、——実は《神の言葉》である。一つの表現であり、返答である¹¹。」

「助けを求めて叫ぶ声を聞いてください」（詩篇5:3）といくら叫んでも、応えがない時に、「呻きも言葉も聞いてくださらないのか」と訴える（詩篇22:2）。そして、我が敵は次のように「絶え間なく嘲^{あざけ}って言

う」,「汝の神はいづくにありや」と(詩篇 42: 11)。

そして、この永遠の沈黙に関して、聖書は次のように答えるのである。

「試練とともに、脱出の道も備えてくださいます。」

(新改約聖書: コリント人への第一の手紙 10: 13)

このことに関しては、後に再度、検討する。

2 人間の幸福と不幸

1) 幸福とは何か

文字上で「福祉」とは幸福を意味する。

「福祉」という語が最初に使われたのは、漢の時代の書『易林』においてである¹²。

「福祉とは、極みなき^{よわい}齡を全うして、喜びに与^{あずか}ること。」

ならば、「幸福」とは何か。それを世界の五大『幸福論』において探ってみることとする。『幸福論』が五つの国にあるということから、それは人間の希求する共通の課題であることが解る。それらは次の通りである。バートランド・ラッセル(英, 1872-1970), アラン(仏, 1868-1951), カール・ヒルティ(スイス, 1833-1909), ショウペンハウアー(独, 1788-1860), 三谷隆正(日, 1889-1944)。

この中で、極めて単純で分かり易いのは、ショウペンハウアーの次の一言である, “幸福とは好きなように生きられること”。しかし、人間、いかに恵まれていても、そのようには生きられない。あらゆるものを持っていた、つまり、権力・富・愛・才能に満たされたロシア・ロマノフ王朝女帝、エカテリーナ II 世(1729-1796)の言葉が、それを物語っている。

「この世に完全な幸福はない」

幸福論の中で、幸福とは何かを箇条書きに整理していて、比較的に理解し易いものが、三谷隆正¹³が紹介した古代ギリシャのエピクロス派の幸福の概念である。幸福とは、消極的な幸福として、1) 痛みのないこと、2) 心が平安なこと、それに積極的的幸福として、3) 喜びがあること、が加わる。先に、

2000 年前の福祉の語源に「喜びに与ること」があると記したが、20 世紀においても、マザー・テレサ(1910-1997)は福祉に関連して、次のような喜びの必要性を語っている。

「心から喜んで『与える人』は、人々に、すばらしい恵みを与えることのできる人です。」(いなます みかこ訳『マザー・テレサ日々のことば』女子パウロ会, 2009)

2) 不幸の研究

福祉は幸福を意味すると書いたが、しかし、社会福祉の中心的な課題は、むしろ不幸にある。

前述した、エピクロス派の「幸福」の概念をひっくり返したものを「不幸」とするならば、「不幸」とは、1) 心身のどこかに「痛み」のあること(心理的な痛みを含む)、2) 心が平安でないこと(不安や恐怖、ねたみや嫉妬があること)、3) 人生に喜びがないこと、となる。

ところが、こうした「不幸」に関する研究と書物が意外に少ないのである。その少ない例の幾つかを挙げてみる。

①フランスの思想家・シモーヌ・ヴェイユの「不幸」に関する記述は『シモーヌ・ヴェイユの不幸論』に紹介してある。

ヴェイユは最初、K. マルクス(1818-1883)に親近感を持つが、やがて、マルクス主義では「社会的抑圧の廃止」または消滅はできないとして、やがて反発していく。

ヴェイユは体系的に「不幸」を思索したのでない。次のような体験から出たものである。

「1930 年代の労働問題・政治問題にみずから進んで参加し、その主体的な経験によって問題の解答を探求した実践的な思想家である¹⁴。」

「彼女はその生涯を通じてつねに、他者の苦痛を見聞するや否や直ちにその痛みを分つ人間となった。そういう《不幸》の経験の頂点に 1934 年から 1935 年にかけての工場生活が位置することには、おそらく誰も異存があるまい¹⁵。」

この工場体験から、彼女は一つの結論を出す。

「何かの形で社会的な墮落かその心配がなければ、本当の不幸はない」

(『神を待ちのぞむ』¹⁶)

社会福祉の視点からは、この結論は、次の3)に書く「社会苦」のように極めて重要である。

それでは、ヴェイユの言う不幸とは何か、それは人間生活の謎である。ヴェイユは言う。「人生の大きな謎は苦しみではなくて、不幸である¹⁷。」なぜ人生に不幸があるのか、これが謎なのである。そして、他の人の不幸に対する彼女の苦しい、矛盾した態度が示される。つまり、他人の不幸を「心から諦めて認め得たことは一度もありません。これはまさしく、神の意志に服従するという義務に対する重大な違反です¹⁸」というのである。神に逆らっても、他人の不幸を諦めて認めることはできないと、ヴェイユは熱く言う。

こうした不幸に直面した人間の叫びの一つに、「なぜ人は私に悪をなすのか? ¹⁹」という問いがある。マザー・テレサの「愛の反対は憎しみではなくて、無関心である」という言葉は有名であるが、その無関心について、ヴェイユは言う。

「不幸は無関心である。不幸にとらわれた人間をことごとく魂の底まで凍らせてしまうのはこの無関心の冷たさ、金属のような冷たさである²⁰」

②我が国では中島義道が『不幸論』²¹を書いている。その中で著者は小市民的な幸福を嗤い（例えば、標的的代表は寅さん）、繰り返し、人間は「どうせ、すぐ死ぬのだから」と述べ²²、それ故に『人生に生きる価値はない』と断言する。

こうした考え方は、人生に一体、何をもたらすのであろうか。後で検討してみたい。

3) 社会苦

先に、人間の苦悩の中で、心身に関する個人的な苦悩について述べたが、それを本人が「仕方がないこと」として“諦める²³”“受け入れる”こともあり得る。障害者福祉でいう「障害受容」である。

しかし、諦めきれないのが、その苦悩の原因が社

会にある場合である。良い社会でありさえすれば、こうしたことにはならないのという思いがどうしても残る。そして、そのような社会のあり様の中で、繰り返し苦い思いをさせられてきた者は、ある種のニヒリズムに陥る。つまり、生きる意味への懷疑を持つのである。果たして努力は通じるのか、正義は勝つのか、と。そしてさらに深く、人生への懷疑、人間存在への疑問に至る時、ヴィクトール E. フランクル (1905-1997) の言う「実存的欲求不満」「実存的虚無感」つまり「生きる意味への懷疑²⁴」という深みにはまってしまうのである。

こうした虚無感から始まった現代社会の現象には、次のようなものがある——自殺・薬物依存・アルコール依存・犯罪・差別・人間軽視の風潮——。

そこには、個人が「生きる意味への懷疑」という深みに落ち込んだ、その人なりの言い訳や理由が存在する。それらの現象は、世間の無知・独断・差別が生んだ面白くない現実であり、そこから生じる無気力、低迷する精神、底知れない無意味感に現代人が落ち込んでしまったのである。それらは社会による「構造的暴力」が原因である。

かつてマザー・テレサは「世界に二つの貧しい国がある」と言った。一つはアフリカ、もう一つは日本である。アフリカは物質に飢え、日本は「精神」に飢えている、と。日本人は精神の飢餓の中にいるのである。

3 人生は無意味なのか

人生は空しいという。「無常」であると表現する人もいる。『平家物語』の冒頭の一句、「諸行無常の響きあり」は日本人の心に染みついてきた。この無常とは何であるか。

小林秀雄は、名高い随筆「無常という事」の中で、それは「空しい」などという感情ではなくて、人間に成りきっていない動物的な状態であるとして、次のように言う。

「この世は無常とは決して仏説という様なものではない。それは幾時如何なる時代でも、人間の置かれる一種の動物的状态である²⁵。」

では仏教ではどのように解釈するのであろうか。

現代の優れた宗教学者・山折哲雄（1931-）は、この日本人の精神の底流にある「無常」という感覚には、三つの無常感があるという²⁶。それらは次の三つの「原則」からなる。

- 1) 世の中に永遠なるものはない（全ては変わる）。
- 2) 形あるものは必ず滅する。
- 3) 人はやがて死ぬ。

筆者はこれに第四を付け加えたいと思う、それは、人類は滅びる、ということである。これらを少し考察してみよう。

1) 世の中に永遠なるものはない（全ては変わる）

この世の中に「不変なものはない」ということである。

ヘルマン・ヘッセ（1877-1962）が『シッダールタ』（1922）で描いた若き日の釈迦の一つの姿は魅力的である。それは、何十日も川岸に座ってガンジス河を見続ける釈迦の姿である。来る日も来る日も見続けて、釈迦はこのことを悟る。目の前の水の流れは、既に少し前の水とは異なるという厳粛な事実――。

かつて鴨長明（1155?-1216）が『方丈記』（1212）に描いたことと同じである。

「行く河の流れは絶えずして、しかも、もとの水にあらず。よどみに浮ぶうたかたは、かつ消え、かつ結びて、久しくとどまりたる例なし。世の中にある人と栖と、またかくの如し。」（安良岡康作『方丈記 全訳注』講談社学術文庫、1980 ルビは略した。）

しかも、その流れは、年月の流れは、年を取るに従って速くなっていく。これが「無常迅速」である。浄土真宗の中興の祖・蓮如（1415-1499）は『白骨の御文章』^{ごぶんしょう}の中で、諸行無常と無常迅速とを一気に表現する。

「されば、朝には紅顔^{あした こうがん}ありて、夕には白骨^{ゆうべ はっこつ}となれる身なり。」（国立国会図書館近代デジタルライブラリー蔵「御文書」より。表記は現代仮名遣いに改めた。）

この「無常迅速」は、現代科学でも証明されている。「ジャンネーの法則」である。19世紀、フランス

のポール・ジャンネ（哲学者、1823-1899）がひらめいた考えを、甥のピエール・ジャンネ（心理学者、1859-1947）が証明する。「時間の流れの速度は、年齢と反比例する」というのである。

2) 人は必ず死ぬ

これは、三つの原則の2)の形あるものは必ず滅する、の人間版である。個人の死である。死亡率100%の人間の姿である。この死を巡って、人間は実に多くの思考を重ねてきた。曰く、「死があるからこそ、生に意味がある」、「死がないことは、永遠の苦しみである」、「生ある時には死はなく、死ぬ時には生は無い。かくして生と死は出会うことはない」とか、「いまだ生を知らずんば、いづくぞ死を知らんや」（孔子『論語』）などである。

しかも個人が死ぬ時には、一切をさらけ出して死ななければならない。良寛（1758-1831）は詠う。

「うらを見せ 表を見せて 散る紅葉」（谷川敏朗『校注 良寛全句集』春秋社、2000）

3) 人類は滅びる

個人を超えた人類自体の滅亡である。

宇宙が誕生して137億年、地球が誕生して45億年、生命が誕生して37億年、人類の誕生には700万年前から440万年前までの諸説がある。アフリカの一地域に誕生した数人の女性が人類の祖先「ミトコンドリア・イブ」と言われる。この子孫が世界中に広がったとされる。

しかし、この生命の誕生以来、地球上に出現した生物約1000万種の、実に70～90%が既に絶滅してきたのだという（小島郁生監修『進化論の不思議と謎』日本文芸社、1998）。ならば、人類はどうか。

NHKは「女と男～最新科学が読み解く性～」を放映し、次のようなことを報道した²⁷。

23対の染色体の23番目の最後の性染色体にあるY染色体が人類の歴史と共に縮小している。そして、500～600万年後にはY染色体は消滅する。

そして、その絶滅の危機に際し、胎生を選択した人類は、他の一部の生物のように、単為生殖もでき

なければ、メスがオスに性転換することもできない。

こうした人類の滅亡を予感して、現代の諸々の努力の無意味さからの救いを求めたのが、阪本勝²⁸の「宇宙の子守歌」（朝日新聞）である。内容の要約は次の通りである。

人類の歴史を見ると、人類は自然によって常に滅ぼされようとして来た。地震、津波、疫病——。人類がいつかは滅びるとするならば、今、行っている諸々の努力（福祉、教育、その他の行政）の意味は何なのか。私には、その寂しさに耐えることができない。誰か私に「子守歌」を唱っておくれ——。

まさに壮大な「宇宙の子守歌」である。

フランスの著名な社会人類学者レヴィ＝ストロース（1908-2009）の次の有名な言葉を想起する。

「世界は人間なしに始まったし、人間なしに終わるだろう。」（『悲しき熱帯』中央公論社、1977）

先に述べたように、中島義道は、人間はすぐ死ぬのだから、結局、『人生に生きる価値はない』と言った。確かに、個人は死に、人類は滅びるであろう。だが、たとえそうであるとしても、そこには一足飛びには届かないと反論する論理を与えてくれるのが、ロシアの作家チェーホフ（1860-1904）の「灯火」（1888）である。彼は文中で老技師から学生に次のように言わせる。人間は直ぐ死ぬから、生きる意味はないのだという、そうした厭世主義に対しては、特に若い青年たちはそのように考えるべきではない。

「もしわれ〜が、下の方の階段の助けを借りず、一足飛びに最上段へ躍りあがるやうな方法を見出さうものなら、その長い全階段は、つまりさま〜な色彩や、音響や、思想を持った全人生は、われ〜にとって一切の意味を失ってしまふことになりま

す²⁹。」

つまり、たとえ短くても死ぬまでの間、人生の道程にあって、一年でも、一日でも、毎日することがあるであろう。その一歩、一歩に人間の人生の意味と輝きがあると言うのである。

フランクフルトは次のような知人の言葉を紹介している³⁰。「人生に耐える唯一の方法は、なんらかの課題をいつもかかえておくことだ。」

ここでは、人生の「意味」が問われている。しかし、それをも含めた人生の「選択」における基準には、いろいろなものが存在する。戦後日本における時代の流れの中において、おおよその順番で現れて来た「選択の基準」は次のようなものであった。

1) 損か、得か、2) 面白いか、退屈か、3) 楽しいか、つまらないか、4) 格好がいいか、悪いか、5) 役に立つか、立たないのか（これにはさらに、①自分のため、②家族・友人のため、③世の中のため、人のため）、そして6) 意味があるか、無いか、である。

今日、小市民的で個人的幸福追求主義の時代であって、多くのことは自分（と、せいぜいその家族）に利益があるか、否かが、判断の基準になっているようである³¹。上に述べた「世のため、人のため」というある種の「使命感」は、奇特なこと、ご苦労なこと、さらには愚かなこととして、薄れていつてしまっているのであろうか。同じ汗を流すなら、稼げるアルバイトの方が、無償のボランティアよりもずっといい、という感覚である。

してみれば、人生の、人間存在の意味を問うことは、自分の利益を求めることより少しは精神的なのかも知れない。しかし、その意味の問い方と方向が問題となるのである。

4 意味意志と、三つの価値

1) 意味への意志³²

先述したフランクフルトは、絶滅収容所の一つ、ダッハウ収容所での体験と、そこからの奇跡的な生還を基に、人生の意味を深く考察し、「ニヒリズムの対抗者」、「『意味』の思想家³³」と言われるようになる。彼は言う。

「人間は、どれほどみじめな条件や状況にあっても、なんらかの意味を見出すことができる³⁴。」

これから後の筆者の記述においては、このフランクフルトの著述と思想を中心にして考察を進めることと

する。

フランクは著書『宿命を超えて、自己を超えて』において、「意味意志」の重要性を解明する道筋を次のように展開する。

①自己超越

人間がいかなる極限状況にあらうとも、そこでは自分を制約・拘束する内外の条件から「自己超越」することができる。つまり、内なる遺伝と外なる環境（強制収容所など）からの超越である。そうした極限状況において決定的な力を持つのが意志である。つまり「人間には態度を決める自由がある³⁵」がゆえに、そういう時にこそ「その人自身が如何なる人間であるか」が問われるのである。しかし、その人が求める「意味は人によって異なる」のであるが、「どんな人間になるかはその人の問題³⁶」である。

フランクは、悲惨な状況において、それに立ち向かうには「精神の抵抗力」を強くしなければならないという。実際、フランクは絶望的な強制収容所において、囚人仲間と次のような約束をして精神の正常さを維持した（このことによって身体の免疫も強くなった）。曰く、「一日一回、心から笑うこと・一日一回、感動すること」。

フランクは強制収容所で一日の過酷な労働の後に、仲間が夕陽を見た時の感動を次のように伝えている。

「世界ってどうしてこう綺麗なんだろう³⁷」

このような状況においては、人が自らの人生の意味を考えるのではなくて、置かれた状況で取ろうとする態度において、「人生の側が人に意味を問う」のである。フランクは言う。

「変えようのない事実直面するときでも、それどころか、変えようのない事実直面するときこそ、その状況を耐えることによって、自分が人間であると示すことができ、人間にどんなことができるかを証明することができる³⁸」

②意味への航路

「意味探求者としての人間³⁹」は、そうした人生の航路をとり続ける。そして、人間は人生の最後の

時まで、“人生の側から意味を問われる”とフランクは言う。彼自身は収容所の仲間が最後に生きる意味を与えられた例を書いている。

ここでは筆者は次のような例を想定してみよう。

自殺者数が年間3万人を超えることが12年続いている我が国で、一人のサラリーマンがいつプラットホームから飛び込もうかと、ふらふら歩いている時、彼の眼前のお年寄りがホームから落ちた。彼は、自らがすぐ直後に死ぬつもりであったことも忘れて、線路に飛び下りて老人を担ぎ上げた。そこから、彼は再び生き直したのである――。

しかし、現実の世界で情緒的に生きる人間は、次のようにも「ふらつく」のである。

「死のうと思っていた。ことしの正月、よそから着物を一反もらった。お年玉としてである。着物の布地は麻であった。鼠色のこまかい縞目しまめが織りこめられていた。これは夏に着る着物であろう。夏まで生きていようと思った。」（太宰治「葉」、引用は『晩年』新潮文庫、2000、初版1936）

「ここ・今・この人にとって」の人生の「一回性と唯一性⁴⁰」の価値は重たい。人生を否定しようと、喜ぼうと、このことは変わらない。

もし、前向きに肯定的に、意味ある人生を過ごそうとするなら、その一つの方法は、フランクが言ったように「なんらかの課題」を持って、毎日毎日の個々の具体的課題を果たすこと、である。チェーホフが言ったように、“一足飛びに最後の日はない”のである。

③PIL（人生の目的—purpose in life）

その「意味ある人生」では、日々、小さな事柄に潜む意味の「発見と実現」が繰り返される。これが「意味発見段階」である。人生の目的を、壮大な構想や未来における達成の中に置く人もいるではあろうが、多くの普通の人にとって、それは日常生活の中において自分のすべきことをこなすことであり、そこにおいて人生に含まれた「個々の具体的意味」を発見するのである。

2) 三つの価値

こうした「意味への航路」において、人間はいろいろな局面で、特に極限状況において、次のような三つの価値⁴¹を求め、守り、それに支えられて生きていくと、フランクフルは言う。

筆者が解釈した、それらの三つの価値とは、次のようなものである。

①創造価値

これにおける中心的なキーワードは「創造」である。人間の創作的な行動や生活において求められる価値である。人間の諸々の作品や行動に込められた、または込めようとする思いと熱意が人間の辛い人生に深い慰めを与える。

アルバート・シュヴァイツァー（1875-1965）はこう言っていたという、「これまでに出会った中でほんとうに幸福な人たちは、なんらかの仕事に没頭している人たちだった⁴²。」

②体験価値

これにおける中心的なキーワードは「体験」である。その中でも「愛する体験」である。「愛」とは何かは、人生の、人間の、譬えようもない大きな課題である⁴³。

エーリッヒ・フロムは「愛とは意志である」（『愛するということ』）と言った。米国で大ベストセラーを書いた精神科医 M. スコット・ペック（1938-2005）は「愛とは、自分自身あるいは他者の精神的成長を培うために、自己を上げようとする意志である」と述べた（『愛と心理療法』創元社、1987）。筆者は、このペックの言葉に加えて、「愛とは意志に基づく**行為**である」とした⁴⁴。

そしてフランクフルは「愛とは、ある人自身が他のある人自身に対してとる全人格的態度⁴⁵」であり、「人間は、ことばによって答えるのではなく、行為によって、責任ある行為によって答え⁴⁶」るのだと言う。

③態度価値

これにおける中心的なキーワードは「態度」である。フランクフルは自らの極限状況における体験から、人間は如何なる状況に置かれようと、自らの意志でどのような態度を取ろうとするのかという価値観を

持っていると言う。いかなる状況・環境・運命も、人間からこの態度価値を奪うことはできないのである。

5 苦悩の意味

これまでに述べてきたように、人生が不条理に満ち、苦悩の中にあるのなら、この「苦悩」の意味は何であろうか。これを次のような段階で考察してみる。

1) 苦悩による、意味ある人生

フランクフルは詩人リルケ（1875-1926）の影響を受けて、「苦悩することで、意味のある人生をおくることができる」と言う。

確かに、その苦悩が人間を滅ぼしてしまうようなものでない限り、「意味」は存在する。ヘミングウェイ（1899-1961）の『老人と海』（1952）において、老人がカジキマグロと凄絶な戦いをした長い一日を描いたこの小説の最後の一行は次のように結んである、「老人はライオンの夢を見ていた」。

無為な人生よりも、苦悩と戦う人生の方が、人間を奮い立たせるのである。

そして、戦いによって傷ついたとしても「傷ついたのは、生きたからである」（高見順「仮面」、1946）と言えるのであろう。

このことは次の 2) に繋がる。

2) 「けっして戦いを放棄しない⁴⁷」（フランクフル）

人生の最後に何が起こるかが解らないなら、最後の大逆転もあり得る。種々の出来事はそれを物語っている。ならば、意志への航路において、人生の戦い（人生そのもの）を放棄することはない。

前述の「老人」は言う、“人は滅ぼされることはあっても（destroyed）、負ける（defeated）ことはない”。まさに「人間の生命はその意味を『極限』まで保持しているのである⁴⁸」。

筆者が青年期の 20 歳の時に達した人生の目的とは「生命の燃焼」であったことを今、想起する。

3) 試練からの脱出

しかし、その航路にあっては、なんと多くの、重たい苦悩が横たわっていることか。

誠実で善良な人（こそ）が、どうしてそのような苦難に遭わなければならないのか。先述したように「神の沈黙」の意図が分からない。しかし、聖書は次のように応える。

「あなたがたの会った試練はみな人の知らないようなものではありません。神は真実な方ですから、あなたがたを耐えることのできないような試練に会わせるようなことはなさいません。むしろ、耐えることのできるように、**試練とともに、脱出の道も備えて**くださいます。」

（新改約聖書：コリント人への第一の手紙 10: 13）

俗に言う、明けない夜はない、暗闇の先には必ず光がある、ということなのであろうか。苦の中にある今は、夜明け前の時であり、一時的に完全な暗闇の中にいるのに過ぎないのである（It is always darkest before the dawn.）。

しかし、意志の弱い者は、信ずる心の弱い者は、夜明けまで待つことができるのであろうか。

こうした光が見えない時においても、次のように歌う人たちがいた！

「それでも人生にイエスと言おう」

（ブーヘンヴァルト強制収容所の囚人たち⁴⁹）

6 意味への航路における他者の存在

この章においては、「意味への航路」を辿る人間が会おう関門を、項目を挙げて考察してみることとする。

1) 自分にも起こる現実

自己中心性が決して抜けない我々は、常に自分に都合の良い考え方をしてしまう。すなわち、あの（恐ろしい）出来事は、たまたま不幸なあの人に起こったことであって、まさか自分に起こる筈はない、と。

しかし、古代ローマの哲学者・セネカ（B.C. 4頃-A.C. 65）は名著『人生の短さについて』において、きっぱりと宣言する⁵⁰。

「誰にも起こりうるのだ、——誰かに起こりうる出来事は」

「或る人に起こることは君にも一つ一つ起こりうることを知るべきである。」

かつて、筆者のゼミ生であった或る学生が次のように言ったことがある。

障害者の出現率が3%であるとして、神様が「三つの石ころ」を投げ、それに当たった者が障害児として産まれる、または障害児を産むとしたら、自分が産まれた時に、ヒュッと耳元を石がかすめた気がする。その時は勘弁して貰えたが、この次、自分は障害児を産むに違いない。

癩病⁵¹の国立療養所の精神科医を勤めた思想家・神谷美恵子（1914-1979）は赴任した長島愛生園で、なぜ自分は歩いて、島から出ることができるのか、あの人たち（患者）はできないのかを省察して、次のように詩の中で詠った⁵²。

「らいの人に——

なぜ私たちでなくてあなたが？

あなたは代って下さったのだ」

そして究極的には、「このおかたがわたしに代わって死んだゆえです」（讃美歌第二編 195 番、『讃美歌第二編』日本基督教団出版局、1967）という告白となるのである。

「他人ごとではない」ことに気づいて、心を痛めて実践に入った社会福祉の実践者は多い。例えば、我が国最初の重症心身障害児施設「島田療育園」を作った小林提樹（1907-1993）は「止むに止まれぬ思い」を抱いたのである⁵³。

2) 孤独（孤立）

人間は孤独には耐えられるが、孤立には耐えられない、ということが言われる。これは関係性の中に生きる人間の姿である。

確かに、このような苦難の道を一人で耐えて生き抜くのは、あまりに過酷である。

そこには、耐え難い孤独が横たわっている。多くの詩人・思想家たちがそれを口にした。

「咳をしてもひとり」と尾崎放哉^{ほうさい}⁵⁴（1885-1926）

は詠う。

「底冷えのような寂しさ」と、哲学者・和辻哲郎（1889-1960）は言う。「骨の凍るような寂しさ」と、社会福祉の思想家・阿部志郎（1926-）は、老人の声を伝える。ヴェイユはいう「魂の底まで凍らせてしまう——無関心の冷たさ」。

その孤独の世界に旅立つ時、釈迦も、西行も子を捨てた⁵⁵。

しかし、弱い一般人の我々にはそういうことはできない。では、その人生の途上に何が必要なのか。

3) 立ち直る過程一人の温かみによる支え

人生につまずき、また絶望した時には、フランクは“主観的ではない客観的な支援”が必要であるという。ここで言う客観的とは次のような意味合いを持っている。

麻薬などは「全く個人の麻痺した主観における意味であって、私の言う本当の客観的な意味、つまり生きがいではない」。

そして精神科医としてのフランクは「カリフォルニアのねずみ」と呼ばれる、ある学者の面白い動物実験の例を要約して紹介する⁵⁶。

ネズミの脳髄に電流を通じると性欲と食欲という生物の根源的な欲望が満足させられる。この実験を重ねるうちにネズミたちは自分でスイッチに乗って電流を通すことを覚えた。しまいには、一日5万回もそれを繰り返すようになった。ところが、その結果はどうか。ネズミたちは本当の摂食衝動や性衝動を忘れてしまったのである。

客観的な支援には、もちろん基本的には社会福祉制度と財政による支援が必要になる。しかし社会福祉の歴史はそれだけでは立ち直れない人たちの事実を多く見てきた。そこに生じたのが、いわばソーシャルワークである。その根源には「人の痛みは、人によってしか癒されない」という人間の心理と真理がある。

1989年、ノーベル平和賞を受賞したダライ・ラマ14世（1935-）は、2010年6月に14回目の来日

を行っているが、かつて京都で講演を行った時の様子が伝えられている⁵⁷。

一人の女子学生が質問した。「自分は今、死の不安に脅えています、どうしたらいいのでしょうか」。ダライ・ラマは舞台に手招きして、彼女を両腕で固く抱きしめて言った。「恐れることはない（Don't worry）」。

女子学生は両眼から涙を流し、深く頭を垂れて舞台を去っていった（筆者要約）。

ここにはソーシャルワークでいう「受容」とか「共感的理解」とかを越えた、人間の深い哀しみを見てしまった“解りあった者同士の慰め”のようなものを感じるのである。

4) 他者への「負い目」

しかし、そうした自らの慰めに至る前に、反省をしておかなければならないことが、我々人間の前に横たわっている。自分が慰められればいいというものでもない。

これは、なぜ自分が健常者でいられるのか、なぜ自分は生活に困っていないのか、なぜ今、一応、幸せでいられるのか、という問いである。誰によって、どのような理由で、そのようなことが許されているのであろうか。そうした自分の、今の、「シアワセ」に気づく時、どこかに「申し訳ない気持ち」を持つ、これが「負い目」である。世間的に「悪い」ことをしたのではないけれど、何かそう思わざるを得ない「痛み」でもある。

このことは柳田邦男（1936-）が『サクリファイス—犠牲』（文藝春秋、1999）で述べたことにつながる。それは次のように要約できるであろう。“「今、自分が、「ここで」、このように平穏に生きていることができるのは、世界の「どこかで」「誰かが」犠牲になってくれているからである。”

これは先に述べた学生の言った「三つの石ころ」の想いと同じである。

この犠牲を他の生命にまで拡大してみると、倉田百三（大正期・昭和初期の思想家；1891-1943）によって、次のような痛烈な言葉が展開される。

この肉体、この血の一滴も、他の「生命」の犠牲でないものはない。この戦慄すべき根本事実を人はどうしてもっと深く思わないのであろうか。『法然と親鸞の信仰（下）』講談社学術文庫、1977)

5) 「^{ぞうどく}雑毒の善」

だからと言って、「人」に善意でもって接すれば良いというものではない、ということは先に述べた。その「善意」に含まれている「毒」が問題となるのである。善意に秘められている身勝手な^{とげ}棘、自己満足によるおしつけ、密やかな優越感、が問われるのである。善導大師から親鸞(1173-1262)に伝わった「^{ぞうどく}雑毒の善」、つまり「他者加害」(親鸞『浄土文類聚^{しゅうしゅう} 鈔』)の恐ろしさである。

ソーシャルワークにおいても、ワーカーに都合の良い働きかけ、上からのパターナリズム、劣等感の裏返しの優越感などに、この「雑毒の善」が表れるのである。

7 超意味(究極の意味)

「世界は超意味を持つ(世界は意味を超えている)」と فرانクルは言う。このようになぜ、フランクルは最後に「宗教」に到達したのか? それは意味の思想家・フランクルが「意味は神に由来する⁵⁸」と考えたからである。しかし、その前に次のようないくつかの検討すべき課題が存在する。

1) 無神論

このようにフランクルが「世界は超意味を持つ」という結論に現代人は納得するのであろうか。つまり、そこには超越者(神)などをおよそ「信じられない」という無神論が強く存在するからである。

現代は神の不在の時代である。「中世のヨーロッパは神を殺した」こと以来、豊かさは人間を生活苦や将来の不安からかなり解放した。科学的な考え方というものが、目に見えない、実証不可能なものなど、どうしても信じられないものに対する疑心を育ててきた。

現代の無神論を三つのタイプに分類したのは、ドイツのマールブルグ大学神学部教授のハンス・マー

ティン・パールト(1939-)である。それらは要約すると次の通りである⁵⁹。

- ①哲学的無神論—フォイエルバッハ(1804-1872)の『キリスト教の本質』に代表される。大島康正(倫理学者・評論家、筑波大学名誉教授、田辺元の高弟の一人、1917-1989)の言う、ヘレニズムにおける「人が神を造った」という「^{じんしん}人神」である。
- ②実践的無神論—現代の、特に青年の間に行き渡っている考えである。神なんかあるものか、という「科学的?」な態度である。
- ③反宗教的無神論—ニーチェ(1844-1900)の「神は死んだ」(『ツァラトゥストラはかく語りき』)に代表される。

先述したように、おそらくは現代の「豊かさ」が現在の種々の不安を一時的にせよ、うち消しているであろう。しかし、宇宙や人間の存在がどのように(how?)生じたかを科学は説明できるとしても⁶⁰、なぜ(why?)存在するのかには答えられない。

フランクルはアインシュタインを見れば解るとして、「科学はいかなる目標も意味も与えることができない⁶¹」と言うのである。

なぜ宗教が必要なのであろうか。死の不安、死後の世界の存在?などの理由が考えられるであろうが、今、生きる身としては、「どうしようもない自分の醜さ、エゴ、罪・悪を、絶対者の目から明らかにされなければならない」という理由があるのではないだろうか。

2) 宗教の姿勢

「不合理なるが故に、我信ず」と言ったのは、テルトゥリアヌスである(紀元160年代~220年代のカルタゴの教父、神学者)。踏み出してみなければ、解らない世界があることを探ろうとしても、それを科学的理性が妨げるのが、現代人の姿である⁶²。

26歳で自殺した夭折の童謡詩人・金子みすゞ(1903-1930)は「星とたんぽぽ」の中で詠う。

「見えぬものでもあるんだよ。」

(『新装版 金子みすゞ全集・II』1984)

宗教での姿勢とは、「飛び越える」ことなのであろう。

3) 誰が救われるのか

親鸞の「善人なおもて往生をとぐ、いわんや悪人をや」という「悪人正機^{しやうき}」説は、あまりにも有名で、多くの論議を呼んできた。例えば、玄奘三蔵(600?-664)の持ち帰った仏典の漢訳を手伝った弟子・窺^き規^き(632-682)は「五姓各別^{ごしやうかくべつ}」(救われるのは能力によって差がある⁶³)と言う。

しかし、この際、考えねばならないのは「悪人とは誰のことか」ということである。そして「悪人」とは私たちのこと、自分自身であることを、明確に自覚しなければならない。そこには、どうしてもない「人間の罪深さ」がある。

キリスト教はいう。

「正しい者はいない。一人もない。——彼らのどのは開いた墓のようであり、彼らは舌で人を欺き、その唇には蝮の毒がある。口は、呪いと苦みで満ち、足は血を流すのに速く、その道には破壊と悲惨がある。彼らは平和の道を知らない。彼らの目には神への畏れがない。」(新共同訳: ローマ人への手紙 3: 10~18)

仏教はいう。

「『罪根深^{ざいこんじん}』というのは、——おおよそ善根すくなきもの、罪業おおきもの、善心あさきもの、悪心ふかきもの、かようのあさましき、さまざまのつみふかきひとを、『深』という。」(『真宗聖典』)

「罪根深重^{ざいこんじんじゅう}」なのである。

親鸞は言う。

「悪性さらにやめがたし ころろは蛇蝎^{だかつ}のごとくなり
修善も雑毒^{ざうどく}なるゆえに 虚仮^{こけ}の行とぞ なづけたる」(『正像末和讃』)

そして、救われなければならないのは、他の誰でもない、この罪深き自分なのである。

4) 果たして「人」には援助できるのか—「立ち尽くす実践」と「共生への漸近線」

すると、一つの疑問が生じてくる。その罪深い人

間の一人である援助専門職が、苦悩を抱える「人」(クライアント)に働きかけ、人生の不幸に立ち向かえるように援助しているのであるが、そのようなことは可能であるのか。援助専門職とは一体、何であるか。果たして「人」を援助できるのか。助けられるべきは、自分自身ではないのか。

してみれば、援助専門職の「究極の実践」とは、ただ「人」が今よりほんの少しだけでも幸福になれるように祈ることのみではないのではなからうか。筆者はこれを「立ち尽くす実践」と名づけた⁶⁴。

また、他者の苦悩に関して、「働きかける側」が自らの内なる差別や偏見に気づき、「働きかけられる側」に対して「共生への願い」を持って働きかけようとした場合にも、「働きかけられる側」が、たとえ、その「差別に対する赦し」を抱いたとしても、援助者は決して今の時点では「当事者」ではないという厳然たる事実によって、決して「完全なる共生」には至らないという構図を、筆者は「共生への漸近線」(限りなく接近しても決してゼロにはならない)と呼んでいる⁶⁵。援助者が最終的にできることは、ただ相手が自分の力で苦悩と立ち向かい、人生の苦難を切り拓く意欲を持ち続けることを、心から願って、その意味への航路でのせめてもの「安らかさ」を祈ることではあるまいか。

筆者は人生において最も必要なものの一つは「明るい意欲」であると思っている。

本論がここまで達した時、最後に、フランクが伝えた幾つかの言葉を繰り返して、論を終えたいと思う。

- ・「神以外はもうなにもおそれなくてもいい」
- ・「苦悩することで、意味のある人生をおくることができる」

そして、「それでも人生にイエスと言おう」。

注・引用文献

- 1 竹内一郎『人は見た目が9割』新潮社、2005。
- 2 現在の世界の身長差の記録は173.5 cm、つまり最長246.5 cm、最短73 cm (2010.3死去)とされる(AFP

- 時事, 2010 年 1 月)。
- 3 中島義道『差別感情の哲学』講談社, 2009。中島は, 2009 年 3 月まで, 電気通信大学教授。社会に衝撃を与えている書物名の主なものは次の通りである。
『人生に生きる価値はない』新潮社, 2009。『働くことがイヤな人のための本』日本経済新聞出版社, 2010。『きみはなぜ生きているのか?』偕成社, 2010。
『善人ほど悪い奴はいない』角川書店, 2010。
 - 4 秋山智久「社会福祉実践と愛—『人』に働きかける愛とは何か」, 日本キリスト教社会福祉学会『キリスト教社会福祉学研究』第 42 号, 2010. 1, 64 ページ。
 - 5 吉田絃二郎『人間苦』, 昭和初期の流行作家であった吉田の代表作は『小鳥の来る日』とされる。早稲田大学文学部講師も勤めた。
 - 6 「福祉」の文字は, 二字ともに幸福を示すにもかかわらず, 社会福祉における幸福の研究は極めて少ない。そこで筆者が試みた次の文献を参考にさせていただきたい。秋山智久「社会福祉実践の視点からの『幸福論』」, 『社会福祉実践論—方法原理・専門職・価値観—』(改訂版) ミネルヴァ書房, 2005, 336 ページ以降。
 - 7 筆者は 40 年来の念願かなって, 2009 年夏にやっとアウシュヴィッツ絶滅収容所を訪ねることができた。そこで見たものは, 普通の人間であるナチスの SS (親衛隊) 隊員の普段の理性的・文化的な生活態度であった。一日の虐殺勤務が終わるとクラシック音楽を聴く態度などがその一例である。
 - 8 『リヤ王』4 幕 6 場。この台詞は黒澤明監督の映画「乱」にもみられる。
 - 9 注意しておかなければならないのは, 仏教でいう「苦」とは「思うようにならない苦しみ」というような意味である。これは後に記したように, ショーペンハウアが, 幸福とは「好きなように生きられること」とした反対の状況(つまり不幸)といえよう。
 - 10 五陰とも書く。これは「人間の生活をつつむ精神的・物質的な一切のものが執着されていることから起る苦」である。岩本裕『日本仏教語辞典』平凡社, 1988, 586 ページ。
 - 11 大木健『シモーヌ・ヴェイユの不幸論』勁草書房, 1969, 103 ページ。
 - 12 秋山, 前掲書(注 6), 336 ページ。
 - 13 ただし, 三谷隆正はキリスト教の立場から, これらを否定し, 神の下での幸福に至っている。三谷隆正は, 明治学院高等部を卒業の後, 新渡戸稲造, 内村鑑三などと親交を持ち, あちこちから望まれながらも第一高等学校校長を生涯貫いた人である。
 - 14 大木, 前掲書(注 11), 3 ページ。
 - 15 前書, 10 ページ。
 - 16 S. ヴェーユ, 渡辺秀訳, 「神を待ちのぞむ」『シモーヌ・ヴェーユ著作集 4』春秋社, 1967, 83 ページ。
 - 17 前書, 83 ページ。
 - 18 前掲書(注 11), 65 ページ。
 - 19 前書, 97 ページ。
 - 20 前書, 102 ページ。
 - 21 中島義道『不幸論』PHP 新書, 2002。
 - 22 こうした考え, 人生観がどのようにして生じてきたかは, 著者の『愛という試練—マイナスのナルシスの告白—』紀伊國屋書店, 2003, にある生い立ちから理解することができる。
 - 23 バートランド・ラッセルは, 幸福のためには「努力とあきらめとのバランス」が必要であると言う。バートランド・ラッセル, 安藤貞雄訳『ラッセル幸福論』岩波文庫, 1991, 254 ページ。
 - 24 ヴィクトール E. フランクル, 山田邦男・松田美佳訳『宿命を超えて, 自己を超えて』春秋社, 1997, 146 ページ。フランクルはオーストリアの精神科医, 国立オーストリア大学教授。1905-1997. 9. 2。代表作『夜と霧』, 『愛と死』, 『「生きる意味」を求めて』(諸富祥彦監訳), 『意味への意思』(山田邦男監訳), 『それでも人生にイエスと言う』春秋社, 1993。『宿命を超えて, 自己を超えて』春秋社, 1997。父親は国家公務員で社会福祉省の局長であった。
 - 25 小林秀雄『無常という事』『モオツァルト・無常という事』新潮文庫, 1961, 87 ページ。
 - 26 山折哲雄『無常という名の病—受け継がれる魂の遺伝子』サンガ新書, 2008, 202 ページ。
 - 27 NHK 総合テレビ, 2009 年 1 月 18 日。NHK スペシャル取材班『女と男—最新科学が解き明かす「性」の謎—』角川文庫, 2011, 264 ページ。
 - 28 当時, この記事は多くの人に衝撃を与えた。
氏は関西学院大学経済学部助教授時代に, その人格と識見を請われて, 兵庫県知事選挙に出て当選, 権力は腐敗することを信じ, 惜しまれながら 2 期で退任した人である。その後, 東京都知事選に出て, 時の東龍太郎に破れた。代表作は, 函館トラピスチヌ修道院に籠もって書いた『流水の記』である。1899-1975。
 - 29 チェーホフ, 中村白葉訳「灯火」, 『チェーホフ選集 第 1 巻』小山書店, 1949, 229-230 ページ。
 - 30 V. E. フランクル, 前掲書(注 24), 19 ページ。
 - 31 そうは言うものの, 日本人が以前から神社・仏閣で祈ることは, 主に自分と家族のことであったのも事実である。例えば, 家内安全, 商売繁盛, 無病息災, 子孫繁栄。そこには, 世界平和などは余り出てこない。
 - 32 V. E. フランクル, 前掲書(注 24), 96 ページ。山

- 田邦男監訳『意味への意思』参照。
- 33 V.E. フランクル, 前掲書 (注 24), 202 ページ。
- 34 前書, 19 ページ。
- 35 前書, 11 ページ。
- 36 前書, 29 ページ。
- 37 V.E. フランクル, 山田邦男・松田美佳訳『それでも人生にイエスと言う』における山田邦男の解説, 193 ページ。
- 38 V.E. フランクル, 前掲書 (注 24), 153 ページ。
- 39 前書, 81 ページ。
- 40 V.E. フランクル, 前掲書 (注 37), における山田邦男の解説, 186 ページ。
- 41 前書, 189-199 ページに詳しく解説してある。
- 42 V.E. フランクル, 前掲書 (注 24), 20 ページ。
- 43 筆者は, 社会福祉実践が単に法令・財政の基に, 事務的に行われる行動ではないなら, そこにあるのは何かという視点を持って, この「人に働きかける愛とは何か」という課題に取り組んだ。注 4, 参照。
- 44 秋山, 前掲論文 (注 4), 72 ページ。
- 45 V.E. フランクル, 前掲書 (注 24), 46 ページ。
- 46 前書, 128 ページ。
- 47 V.E. フランクル, 前掲書, (注 37) 46 ページ。
- 48 前書, 199 ページ。
- 49 前書, 161 ページ。
- 50 セネカ, 茂手木元蔵訳『人生の短さについて』岩波文庫, 1980, 100-101 ページ。
- 51 筆者は, ハンセン病への差別の歴史の中にある「怨念」を表現するために, 敢えて「癩病」と表記する。
- 52 神谷美恵子『人間をみつめて』みすず書房 [神谷美恵子著作集 2], 1980, 133 ページ。
- 53 秋山, 前掲書 (注 6), 5 ページ。
- 54 尾崎放哉は, 東大経済学部卒で, 大手の生命保険会社の支店長まで勤めたが, 突如, 放浪の旅に出た。最後は小豆島で過ごす。

この句に対して, 次の俵万智 (1962-) の短歌は全く別の状況を映し出している。

「寒いね」と話しかければ「寒いね」と答える人のいる暖かさ (『サラダ記念日』)

- 55 釈迦は我が子に「ラーフラ」(悪魔)と名付けた。西行は出家の時, 我が子を縁側から蹴落とした。
- 56 V.E. フランクル, 前掲書 (注 24), 133 ページ。
- 57 山折哲雄, 前掲書 (注 26), 299 ページ。
- 58 V.E. フランクル, 前掲書 (注 24), 122 ページ。
- 59 秋山智久「社会福祉実践におけるプロテスタントと浄土真宗の近似性—他者との関わりと救済の視点より—」, 日本キリスト教社会福祉学会『キリスト教社会福祉学研究』第 39 号, 2007.1, 25 ページ。

- 60 しかし, 今日でも, 従来知られてきた原子や分子は宇宙に存在する物質の 2 割程度にしか過ぎず, 他の 8 割は未だに科学では不明な「暗黒の物質」(dark matter) であるという。(NHK「クローズアップ現代」2010.9.13) 科学で解らないことは限りなくある。

- 61 V.E. フランクル, 前掲書 (注 24), 101 ページ。

- 62 いくつか面白い例を挙げよう。

映画「インディ・ジョーンズ: 最後の聖戦」の最後に近いシーンで, 主人公が橋の架かっていない, 底の見えない, 深い岩の亀裂に神を信じて足を踏み出した瞬間に, 主人公の足許に岩の橋が現れるシーンがある。監督の言いたかったことは, 理性で納得できなかったとしても「信じて踏み出す」という姿勢の重要さなのではなかろうか。

逆に, 信じた振りをしても, 本当は信じ切れない姿を描いたのは, NHK スペシャル「アインシュタインロマン」である。大峡谷から落ちてしまったアインシュタインは, 偶然に絶壁の途中から突き出ていた一本の松の木にぶら下がることになる。「助けてくれー」と叫んでもどこにも聞こえない。手が疲れてくる。その時, 雲が割れて声がする。「アインシュタインよ, 私は神である。私を信ずるならば, あなたを助けてあげよう」。彼は助かりたい一心で「信じます」という。すると声が言う「ならばその手を離せ。私が受け止めてあげよう」。落下の法則を知る物理学者アインシュタインは, 手が離せない。(NHK「アインシュタインロマン—プロローグ 知の冒険」1991.4.26)

口先だけで, 本当には信じ切れないのである。

- 63 秋山, 前掲論文 (注 59), 20 ページ。
- 64 秋山, 前掲書 (注 6), 348 ページ。
- 65 秋山智久「共生への漸近線」, 秋山智久・平塚良子・横山穰『人間福祉の哲学』ミネルヴァ書房, 2004, 27-28 ページ。

(あきやま ともひさ 福祉社会学科)